

問題一 次の文章を読んで、後の問い(問一～問六)に答えよ。

憲法で教育を受ける権利が保障されている。これは親から見ると、子どもに教育を受けさせる義務である。私たちが公立の小中学校を国民の税金で賄っているのはなぜかというところ、この社会を支えていくのに必要な基礎的な知識・能力を次世代に身につけてもらうためだ。

ア、義務教育であんまりゆるくやってしまうと、社会的能力の再生産ができなくなってしまう。社会に食い込んでいけない人たちを送り出してしまふのだが、それは、罪なことだと私は思っている。だから、ゆとり教育が見直しということになったのは、基本的には賛成だ。

もちろん楽しくなければやる気にならないという面もあるから、当然、楽しさも先生は生み出していくわけだが、しかし、生徒がどんなに「うなー」と嫌がろうが何と言おうが、必要なことはきちんと身につけさせる。学校とは、そういう場所なのだ。

大学生でも、専門としてやってきた学問について自身をもって語ることのできる者は少ない。鈴木敏文さんはこう言っていた。「面接試験で大学生がバイトとかサークルの話をするのは、自分は評価しない。何を勉強してきたのかが言えないとだめだ」と。

勉強が本業だと言うことが、学校では忘れられがちだ。勉強が生徒を苦しめるかのようなことが言われているが、それは先生のほうが、本当にその勉強が面白いという水準にまで達していないからだと思ふ。本来は、やはりとてつもなく面白いことなのだ。

理科などという科目は、いま思うと、もっと真面目にやっておけばよかったと、私でさえ悔やむぐらいだ。というのは、一個一個が大発見なのである。そこには人類が始まって以来の興奮みたいなものがある。たとえば、ワトソン・クリックによるDNAの二重らせん構造の発見など、三日ぐらい眠れない、というほどの感動を受けた人もいると思ふ。

生物の授業で私たちはDNAの模型をつくらされて、四つの塩基を一個一個貼ってつないでいった。ああ、くだらないことだ、高校生がやることではない、と思つたものだが、いまでもよく覚えている。手作業というのは、やってみると記憶に残るものなのだ。科学者の苦労が一万分の一でも共有できたような気持ちになるから不思議だ。

たとえば、美術の時間でも、ルノワール風ならこう描く、などと教わりたかつたな、と思ふ。ルノワールだったら、リングを前にして(デッサンはできているとして色を付けていくだけで)する。そういう紙が配られていて、「この色とこの色とこの色を出して、こうやって描くと、ちよつとルノワールっぽいでしょう」「次はゴッホ。荒々しく黄色を塗るのがコツ。絵の具をもつたいないなどと考えず、黄色をグチャツとやって。ほら、ゴッホっぽいでしょう」といった教え方だ。

そういう授業をやってみると、何がいいのか。一度描く側に回ってみると、名画の面白さは、それまでと全然違うものになっているのだ。「これは描いていて、自分も気持ちがいいよ」とか「これだけ黄色を使うといいな。魂が燃え上がるよ」といった見方が生まれてくる。

ゴッホというのは生前は最後まで絵が売れなかったけれども、当人のなかでは壁を突き抜けるブレイクスルーの瞬間があった。それは南フランスに行った瞬間だ。日本の浮世絵と出会ったことも一つだろうが、しかし、南フランスで出会った輝く太陽は決定的であった。そこで見出した色が黄色だったのだ。

それまで炭坑夫の顔などを描いていたが、もう、とにかく暗い。ところが、南フランスへ行つて、麦畑とか跳ね橋、星空、糸杉などを描き、南フランスの風と光がもたらす輝きを、黄色とい

う色を獲得することによって表現できるようになった。それによって彼は自分の内側の情熱を、描く対象と一体化させることができたわけである。

彼には先生らしい先生はいなかったけれども、もしいい先生がいれば、オランダで炭坑夫などを描いているゴッホに向かって、「うん、君は日本の浮世絵を見たほうがいいよ」と言って、浮世絵をあげただろう。「この絵のシンプルさはどうだ。そして、色のクリアさ……」。実際にゴッホは浮世絵に惚れ込んでいった。

インスピレーションの湧くものと出会わせる、刺激のある環境を与えるのも教師の役目だ。「君は絶対に南フランスに行った方がいいよ。輝く色が君を変えるであろう。ついでに南フランスの安い宿屋（アパートメント）を私が紹介して、いま予約してあげるから」。段取りまで整えてあげる。「君が行けば、もうわかるようになっていくから」という形で紹介する……。

天才といわれている人たちは、自分自身が **A**。自分はいま **(a)** **テイタイ**している、その自分をもっと伸ばすには、何と出会わなければいけないのか、が本能的に察知できるということだ。自分で自分を教育できる人は伸びていく。

才能とは、自分に必要なものがわかるといふことである。

ハンマー投げ五輪金メダリストの室伏広治さんは、自分に必要な練習を自分で工夫する。対談の際に、一本歯のゲタを使った **(b)** **タンレン**法や相撲トレーニングなどを実際にやって見せてくれた。そんな彼にもコーチがいる。お父さんの重信さんだ。

重信さんは「アジアの鉄人」、ハンマー投げのアジアの無敵のチャンピオンだったが、世界には届かなかった。その気持ち、親の怨念のようなものがある。「自分はアジアどまりだったが、しかし……」といった執念だ。だが、「ハンマー投げをやれ」とは絶対に言わなかったのだ。「好きなスポーツをやりなさい」と言っていた。しかも、息子が実際にハンマー投げに手を着けてからも、ほとんどずっと見守っている。めったに口を開かない。「見ることがコーチの仕事なのだ」と言うのだ。ずっと見つめて、たまにひとことポンと言う。そこで変化が起こるといふ。

見抜いて見抜いて我慢をする、見守る能力が、**(1)** **教師**にとって**重要**である。思いついたことを全部言ってしまうのはだめなのだ。「君の悪いところ、いまちよつと見ただけでも、七つぐらい見つかった。順々に言いますよ」といった感じで、私などすぐ伝えたくなくなってしまふ。けれども、まず我慢する。その中で一つだけ言うかどうかを迷う。しかも、それを言ったからといって、良くならない。だめなところがわかるのは教師にとって非常に大切な能力だけれども、それですべてではない。

それは必要条件で大事なことだが、それで十分なわけではない。問題は、その状況を **(c)** **外** **カイ**するアイデアが浮かぶかどうか、ということだ。だから悪いところを指摘して直る人に対しては、指摘してあげればいい。でも、悪いところを言われてすぐに直るほど、上達は簡単ではない。そうではなくて、何か別の練習をさせることによってその悪いところが直っているという、そんな練習方法を思いつくかどうか。

イ **ポジティブ**（積極的・肯定的）なコメントをすることによって、そこに意識が行き、それによってだめなところが直ってくる。良いところのある部分を拡大することによって、悪いところのマイナスポイントが減っていくやり方。これが基本だ。実際に、厳しい勝負事になってくると、どの技も平均点のレベルという人間よりも、何か強い技を持っている人間のほうが勝てる。社会の中でもはつきりとした技を持っている人間のほうが使いやすい。使いやすいというのは悪い意味ではなくて、仕事を頼みやすい、任せやすいという意味だ。

そう考えると、いろいろな悪いところが見えたとしても、めざす最終型がヴィジョンとして見えていることが大事である。もちろん、完全にではなくていい。

ゴッホの最終型なんて、おそらくゴッホとつきあっている人には見えなかっただろう。けれども、ゴッホの中の、止むに止まれぬあの異常なまでのパッションを表現するには、「もっと光が必要なのだ」とか「もっと何と出会う必要があるのか」というようなことが直感的にわかる人はいたかもしれない。そういうことがわかるのが教育者としてのセンスである。

そうすると、教育者の中に類型として二つの能力が必要とされる。一つは、個別対応的に課題を見抜き、練習メニューを(d)リンキ^レ応変に工夫できる力。もう一つはスタンダードな教育力。どんな生徒にとっても必要なことを提供できる力。その人の好き嫌いとか、その人の身体の向き不向きとかいったことを超えて、とにかく絶対に必要な力を引き上げていく。

ウ、「百ます計算」や漢字の書き取りがそうだ。「向き不向きがあるから、『百ます計算』なんてやらないでいい」という問題ではない。とりあえず、(2)人は頭を働かせる必要がある。前頭葉、前頭前野を働かせるべきだということにおいて異論はない。

そのことがコミュニケーション能力の基礎であり、人へのやさしさにもつながっている。前頭前野を働かせるようにするのが、教育の大きな目標になるのは間違いないところだ。

すると前頭前野を活性化させる「百ます計算」は算数のようだが、それを超えて意味がある。すべての教科をやる前、すなわち朝やつてみようというのは大変いい。**エ**、自分の記憶がどんどん縮まる。「自分に挑戦するのだ。他人との競争ではない。昨日の自分を超えよう」といったら、誰だって意欲が湧く。

またフォーマット(型)もシンプルなので、普及しやすいという点でも優れたやり方である。また、簡単に効果がある型として、「朝の十分間読書運動」も優れている。本の好き嫌いに関係なく、「読書は必要なことなんだよ。とにかく自分の好きな本を読んでごらん」と指示することによって、クラス全体が落ち着いて授業に入れるようになる。

本を落ち着いて読める人間というのは、人をむやみに殴ったり、授業中に騒いで飛び出したりしないものだ。それが心の訓練というものである。前頭前野を働かせて、自分の感情をコントロールできる状態だ。一つのフォーマットを通して全員的能力を上げていく。そういうスタンダードな手法を持統的に運営できるのは教育力の大切な基礎だ。

正直な話、教師というものはほかの職業にくらべて、資質が大きく影響する仕事だと私は思っている。もって生まれたもの、そしてそれまでの人生でつちかかってきたものを、いまさら変えることはできない。その人の人間性、能力すべてがあらわになってしまう。その人の気迫とかメンタルコントロールの能力、学問をどれだけしてきたのか、何をしてきたのか、ということが全部見透かされてしまう。そういう意味ではごまかしが利かない難しい仕事なのだ。**オ** 決定的に資質が影響する。それは生まれた時の素質だけではなくて、その年齢までに積み重ねたものという意味を含めて、である。

だから逆にいえば、そういう意味での資質のない人を二三歳ぐらいで採用して、研修をやつて、教室へ送り出すのは(e)ムボウ^レというものなのである。採用に関してもっとエネルギーと費用が注ぎ込まれるべき領域である。

問一 傍線部(a)～(e)を漢字にしたとき、そのうちの一字を含むものを次の(1)～(4)の中から、それぞれ一つずつ選べ。その際(a)～(e)は、それぞれ解答番号1～5に対応するものとする。〔解答番号1～5〕

- | | | | | |
|----------|--------|--------|--------|--------|
| (a) テイタイ | (1) 所帯 | (2) 耐性 | (3) 堆積 | (4) 滞在 |
| (b) タンレン | (1) 清廉 | (2) 熟練 | (3) 錬成 | (4) 連続 |
| (c) ダカイ | (1) 階層 | (2) 解析 | (3) 改造 | (4) 疎開 |
| (d) リンキ | (1) 機嫌 | (2) 任期 | (3) 發揮 | (4) 隆起 |
| (e) ムボウ | (1) 冒流 | (2) 参謀 | (3) 繁忙 | (4) 脱帽 |

問二

ア

 ～

オ

 に入るものとしてもっとも適切なものを、次の(1)～(5)の中から、それぞれ一つずつ選べ。その際

ア

 ～

オ

 は、それぞれ解答番号6～10に対応するものとする。〔解答番号6～10〕

- (1) あるいは (2) しかし (3) しかも (4) たとえば (5) だから

問三 傍線部(1)「教師にとって重要」なことについて、筆者は本文中でどのように捉えているか。その説明として適切なものには(1)を、適切でないものには(2)をそれぞれマークせよ。その際(i)～(iv)は、それぞれ解答番号11～14に対応するものとする。〔解答番号11～14〕

- (i) 良くない状況になった場合、その状況を変えるアイデアが浮かび、工夫し、個々に合った改善方法を提示することができること。
- (ii) 気づいた段階で細かなところまで一つ一つ悪いところを指摘し、その都度、順番に細かく説明し、理解させること。
- (iii) 指導する過程で、いろいろな悪いところが見えたとしても、めざす最終型がヴィジョンとして完全に見えていて、その場しのぎではなく、長期的な視野をもって関われること。
- (iv) 指導する過程で、気づいたことを全て言ってしまおうのではなく、あまり口を開かず、見抜いて見抜いて、まず我慢をするといった見守る能力をもっていること。

問四 傍線部(2)「人は頭を働かせる必要がある」理由に関して、筆者の説明と一致するものには(1)を、一致しないものには(2)をそれぞれマークせよ。その際(i)～(iv)は、それぞれ解答番号15～18に対応するものとする。〔解答番号15～18〕

- (i) 好き嫌いや向き不向きに関わらず、特定の能力のみを伸ばすことで必要な力が向上するため。
- (ii) 読書は心の訓練にもなり、自分の感情をコントロールできるようなるとともに、言動が落ち着いてくるため。
- (iii) 「百ます計算」はフォーマット(型)もシンプルであり、一つのフォーマットを

通して全員の能力を上げていくことが簡単で効果があるため。

- (iv) コミュニケーション能力の基礎であり、人へのやさしさにもつながり、教育者にとっても教育の大きな目標になるため。

問五 空欄

A

に入るもっとも適切な語句を次の(①)～(④)の中から一つ選べ。

〔解答番号19〕

- (①) 他者の生徒になれる
(②) 自分の生徒になれる
(③) 自分の先生になれる
(④) 他者の先生になれる

問六

次の(i)～(iv)の文を読み、筆者が述べている「教師」と一致するものには(①)を、一致しないものには(②)をそれぞれマークせよ。その際(i)～(iv)は、それぞれ解答番号20～23に対応するものとする。〔解答番号20～23〕

- (i) 教師という仕事は、特に生まれた時の素質が最も重要であり、ごまかしが利かない難しい仕事である。
(ii) 思いついたり、気づいたりといったためなところがわかるのは教師にとって非常に大切な能力であり、それがすべてである。
(iii) 教師は、インスピレーションの湧くものと出会う機会を作り、刺激的で好奇心が育つ要素のある環境を与えることが役目である。
(iv) 教師というものは、その人の人間性や能力すべてがあらわになり、ほかの職業にくらべて、素質だけではなく経験が大きく影響する仕事である。

問題二 次の文章を読んで、後の問い(問一～問六)に答えよ。

中学校の休み時間。教室の中では、クラスメイトがいくつかの輪になって騒いでいる。私も大体、そのどれかに加わっていて、私の周りに輪ができることもあった。友人たちとは仲が良かったし、学校も楽しかったが、それでも、時々ふと、みんなが盛り上がっている話題に、さほど共感してない自分に気づくことがあった。面白くないというより、どこか満たされない感じだろうか。

小学生のころまでは、そんなギャップは感じなかった。

A

、中学生になった頃から、

笑顔で調子を合わせてはいるものの、自分はずっと、みんなとは感覚がズレているんじゃないだろうかと感じることが多くなった。

私はしばらく、それは、自分とその学校とがあってないからなんだと考えていた。

私の通っていた中学は、カソリック系の私立で、後に中世ヨーロッパの(a)イタン審問をテーマにした小説『日蝕』を書くほどキリスト教にのめり込んでゆく私も、当時はただ、反発しか

感じていなかった。**イ**、聖書に書いてあることは一字一句すべて気に入らず、シスターの話の一言一言にムカムカしていた。それを思った通り口にしていたから、私はよく、宗教の授業の後、担任に職員室に呼び出されて、説教をされた。シスターの校長と、個人面談をしたこともある。

級友の多くがクリスチャンだったというわけでもないから、そのことと、教室での違和感とは関係がなかったはずだが、とにかく、田舎の公立小学校から試験を受けて私立に入学した私は、三年間とうとう、あまり居心地の良さを感じなかった。それで、高校はむしろ真反対の校風の学校にしようと考えて、「文武両道」を掲げる地元の公立高校に進学した。

ところが、ここでも私の違和感は一向に解消されなかった。**ウ**、いよいよ孤独を感じるようになって、さすがに今度は、やっぱりこの学校も自分とは合わない、とは思わなかった。これは「個人」と社会との根本的な矛盾で、そうである以上は、どここの学校に行っても同じなのだと思えるようになった。

今振り返ると、中学にも高校にも良い思い出はたくさんあり、友人にも恵まれていたが、当時はとにかく、教室という場所そのものに耐え難さを感じていた。

丁度そうした(1)ギヤツプを感じ始めた頃から、私はよく小説を読むようになっていた。以前は大して読書に興味がなかったが、十四歳の時に、三島由紀夫の『金閣寺』にショックを受けて以来、三島文学のファンになり、彼の作品を読むのと同時に、彼が影響を受けた作家の本を読むようになった。こういう読書の仕方は、今でも変わらない。好きな作家が好きだった本というのは、大体、私も好きなものである。

私は特に初期のトーマス・マンが好きだった。私が感じていたような周囲とのギヤツプという意味では、大宰治でも良かったのかもしれないが、自分が疎外されている世界を、敵意を持って否定的に描くのではなく、むしろ憧れとともに、明るく肯定的に描くところに、マンの独特の魅力があった。

私がかつき書いたように、自分の状況を、個人と社会との矛盾として理解するようになったのは、主にマンの影響である。

私は、『ブッデンブローク家の人々』や『トニオ・クレージェル』、『道化者』といった小説を読みながら、ここに自分がある！と感動に打ち震えていた。書かれた時代も場所も全く違うのに、どうしてこんなに俺の気持ちがわかるのか？ 当時はまだネット(註)もなかったから、小説は、自分の生まれ育った時代や場所から解放してくれる、最も身近な存在だった。

そのうち私は、家で本を読んでいるときの自分こそは「本当の自分」で、教室で友達と笑い合っているのは、「本当の自分」じゃないんだと思うようになった。文学を愛し、美に憧れている自分こそが本場で、学校にいる時の自分は、表面的に仮面をかぶって、周りに合わせているだけなんだ。

十代にありがちな思い込みから、当時はこれを、私に特別なことのように感じていたが、恐らく、似た経験を持っている人は多いだろう。過去ではなく、今現在、まさしくそうだという人もいるに違いない。

日常のいろいろな場面で、居心地の悪さを感じたときに、「場の空気」に合わせたキャラを演じることで、その場を切り抜ける。そうしてあとで、あれは「本当の自分」じゃないんだと言い聞

かせる。

こんなふうに、(2)「本当の自分／ウソの自分」というモデルは、手軽でわかりやすい。このモデルでは、「本当の自分」と「ウソの自分」とのあいだに、明確な(b) ジョレツがあり、価値を持つのは、「本当の自分」の方である。嫌々ながら、愛想笑いで切り抜けたのは、その場限りの表面的な自分だった。学校で何となく満たされない、刺激に飢えている自分は、かりそめの姿に過ぎない。そう割り切ることで、「本当の自分」の価値を守ろうとする。

しかし、このモデルには厄介な問題がある。

私は、今こんなことを書いていて、中学や高校時代の友人が、この本を読んだなら、どう思うだろうかと、ちよつと胸が痛んでいる。「平野は俺たちと楽しそうに喋ってたけど、あれはただ、適当に合わせてただで、本当は全然、楽しくなかったのか？」——いや、決してそうではなかった。楽しかった。でなければ、今に至るまで、彼らとの友情が続くはずがない。そして、この「本当の自分／ウソの自分」というモデルの問題は、まさにここにあるのだ。

キャラというのは演じられた自分であり、仮面というのは、使い捨てのかりそめの顔である。私の中には、それを演じている「本当の自分」があり、かぶっている仮面の下には「素顔」がある。——もしそうだとするなら、相手も同じだろう。

だとすると、私たちの人間関係とは、一体何なのか？ さっきまであんなに親しくしていた友人や恋人との会話は、全部上っ面の、見せかけだけのものだったのか？ 自分は「本当の自分」を、とうとう隠し通したまま、「ウソの自分」で、中学や高校の同級生と付き合い続けていたのか？ そして、相手もまたそうだったのか？

そうではないだろう。確かに小説は好きだったし、学校では満たされないものを感じてもいた。しかし、だからといって小説だけ読んでいけば、「ウソの自分」を生きなくていいと、孤独な幸福感を感じていたかという、必ずしもそうではない。私は何だかんだで、皆勤賞に近いくらい、毎日学校に通っていた。

コミュニケーションは、シンプルであることが理想である。お互いが仮面同士、キャラ同士でやりとりをしていて、「本当の自分」はまた別だというようなややこしい関係は、大いにストレスとなる。この人のこの笑顔は、信じてても良いものだろうか？ 今言ったことは本心だろうか？ そんなことを疑い出すと、誰と接していても、(c) ケイカイを解くことができないし、その関係をシニカルに捉えるようになってしまう。

そして、最大の問題は、では、「本当の自分」とは何なのか、ということである。キャラや仮面が表面的な「ウソの自分」だとするなら、どこかに「本当の自分」がなければならぬ。

揺るぎない、(d) カッコたる自分を探さなければならぬ。不安定に流されてしまうことのない、自分の本性を知らなければならぬ。自我を確立しなければならぬ。

そんなお題目のために多くの人が悩み、苦しんでいる。エ、「本当の自分」とは、一体何をもって「本当」と言うのだろうか？

そもそも、私たちは、そんなに意識的にキャラを演じ分けたり、仮面を身につけたり出来るのだろうか？ 心の動きや感情はどうなるのだろうか？ 二十世紀の無意識の発見は、一体何だったのか？ 汗をかいたり、心拍を速くしたりといった自律神経の働きは？

以前に私は、一年間、パリで生活したことがある。当時は、フランス語の読み書きは多少出来たが、会話はサッパリだったので、しばらく語学学校に通うことにした。

申し込みに行くと、その場でクラス分けの試験があった。試験といっても、フランス語で自己紹介をして、簡単な質問に答えるだけである。

私は実は、パリ到着後の数日間、色々人と人に会う用事があって、自己紹介だけは何度もやっていたので、妙に流暢になっていた。もちろん、予め辞書あひらで必要な言い回しなどを調べておいて、こっちから一方的に喋るだけである。それで、この面接の時も、淀みなくスラスラと自己紹介をした。

結果、困ったことに、私は一番上のクラスに入れられてしまった。私は自分の実力をよく知っていたので、無理です、と慌てて言ったのだが、面接をした女性の校長は、「日本人はみんなそう言うけど、大丈夫。私の二十年の教師生活の経験から言って、あなたは一番上のクラスです！」と取り合ってもらえなかった。

授業は少人数制で、その一番上のクラスには、六人しか生徒がいなかった。私以外は、全員ドイツ語圏のスイス人だった。スイスの公用語はフランス語とドイツ語なので、ドイツ語圏とは言っても、彼らは子供の頃から、学校で英語と同じようにフランス語を勉強している。当然、喋らせてもかなり上手い。私は予想通り、完全に落ちこぼれてしまった。

授業は輪になって行われたが、私はものすごく久しぶりに、自分の当てられる問題を必死で先回りして調べるといようなことをやった。しかも、途中で誰かが間違うと、その問題が次の生徒に回されて、順番がズレてしまうので、また慌てふためくことになる。そんな情けない（e）キンパク感を懐かしがる余裕もなかった。

私は、やっぱりクラスを替えてもらおうと思ったが、無理してでもついていけば、上達も早いのだろうかと考えて、しばらくはそのクラスに留まり続けた。面接をした校長も、替える必要はないという考えだった。

そのうちに、私は段々、自分がひどく陰気な人間になっていくのを感じた。授業中もパツとしない。休み時間に、他の生徒と喋ろうと思っても、彼らは彼らで気楽にドイツ語で話している。大体、あまり笑わない人たちだったが、話しかけても会話は弾まず、冗談の一つさえ言うことができない。子供の頃から口が達者だった私は、言葉が不自由というのは、こんなに苦しいことなのかと、今更のように身に染みて感じさせられた。

毎日、陰々滅々たる気分（！）で学校をあとにしていた私は、よく、パリで暮らす日本人の友達と、オペラ座近くのラーメン屋に昼御飯を食べに行つた。オ、私は一瞬にして快活になって、「いやー、もう、エライ目に遭ってるよ」と、語学学校での様子を、おもしろおかしく饒舌に語つた。

私は結局、しばらくして、一つ下のクラスにレヴェルを下げてもらったのだが、そこはまた、思った以上にみんな喋れなくて——どうして中間がない!?——私は急に優等生になった。日本人も数名いて、おかげで私は、語学学校でもようやく明るい表情を取り戻した。

さて、そこで考えるのだが、このときの私は、語学学校では「陰気なキャラ」を演じ、日本人の友人の前では「快活なキャラ」を演じていたのだろうか？

当然、違う。私は何も、好き好んで、語学学校では陰気なキャラで行こう！などと決めたわけではない。出来れば明るい自分でいたかったが、自然と暗くなつたのである。あの時同じクラスだったスイス人たちは、もう私のことなど忘れているだろうが、もし覚えていたとしても、

「A」という印象しかないだろう。

そして、無論、私は日本の友達の前で、あえて快活なキャラを演じていただけではない。やはり、無意識のうちに、勝手にそうなっていた。語学学校で、わざとイヤな気分になろうとしたわけでもなければ、ラーメン屋で明るさを捏造したわけでもない。(3)感情は、私の意識とは別に勝手に変化していた。それぞれの人格も、決して意図的に操作していたわけではなかった。

(平野啓一郎『私とは何か「個人」から「分人」へ』より)

(註) 「ネット」⇨インターネット

問一 傍線部(a)～(e)を漢字にしたとき、そのうちの一字を含むものを次の(1)～(4)の中から、それぞれ一つずつ選べ。その際(a)～(e)は、それぞれ解答番号24～28に対応するものとする。〔解答番号24～28〕

(a) イタン	(1) 単価	(2) 探索	(3) 端正	(4) 感嘆
(b) ジョレツ	(1) 強烈	(2) 優劣	(3) 決裂	(4) 参列
(c) ケイカイ	(1) 解雇	(2) 戒律	(3) 音階	(4) 壊滅
(d) カツコ	(1) 捕獲	(2) 輪郭	(3) 厳格	(4) 確証
(e) キンパク	(1) 拍車	(2) 伯爵	(3) 迫害	(4) 博識

問二

ア

 ～

オ

 に入るものとしてもっとも適切なものを、次の(1)～(5)の中から、それぞれ一つずつ選べ。その際

ア

 ～

オ

 は、それぞれ解答番号29～33に対応するものとする。〔解答番号29～33〕

(1) しかし (2) すると (3) むしろ (4) ただし (5) とにかく

問三 傍線部(1)「ギャップ」について、その関連する内容として適切なものには(1)を、適切でないものには(2)をそれぞれマークせよ。その際(i)～(iv)は、それぞれ解答番号34～37に対応するものとする。〔解答番号34～37〕

- (i) 高校は中学とは異なる「文武両道」を掲げる公立高校に進学したが、ここでは、居心地が良く、違和感や孤独を感じることはなかった。
- (ii) 中学はカソリック系の私立の学校で、聖書に書いてあることがすべて気に入らず、自分とその学校とが合っていないと感じていた。
- (iii) 周囲が盛り上がっている話題に共感してはいたが、面白くないというより、どこか満たされない感じであった。
- (iv) 笑顔で調子を合わせてはいるが、自分は周囲とは感覚がズレているのではないかと感じていた。

問四 傍線部(2)「本当の自分／ウソの自分」についての筆者の考えについて、その内容とし

て適切なものには(①)を、適切でないものには(②)をそれぞれマークせよ。その際(i)～(iv)は、それぞれ解答番号38～41に対応するものとする。【解答番号38～41】

- (i) コミュニケーションは、互いにキャラを演じながらやりとりをし、互いの「本当の自分」をほとんど見せないことがシンプルであり、理想である。
- (ii) 表面的な「ウソの自分」があるのならば、はっきりとした、揺るぎない自分の本性を知ることが必要で、そのために自我を確立しなければならぬ。そのことで多くの人が悩んでいる。
- (iii) 価値を持つのは「本当の自分」の方であり、学校で何となく満たされない自分は、かりそめの姿に過ぎず、そのように割り切ることで「本当の自分」の価値を守ろうとする。
- (iv) 人間関係において、友人や恋人との会話は、すべて表面的で見せかけのもので、「本当の自分」を隠し、「ウソの自分」で接する方が良い。それによりストレスが軽減し、ややこしい関係になりにくい。

問五 空欄

に入る語句としてもっとも適切なものを、次の(①)～(⑤)の中から一つ選べ。【解答番号42】

- (①) 内気で、やさしい人
- (②) 内気で、暗い人
- (③) 内気で、情けない人
- (④) 内気で、優秀な人
- (⑤) 内気だが、明るい人

問六

傍線部(3)「感情は、私の意識とは別に勝手に変化していた」について、その「変化」の内容として適切なものには(①)を、適切でないものには(②)をそれぞれマークせよ。その際(i)～(iv)は、それぞれ解答番号43～46に対応するものとする。【解答番号43～46】

- (i) 日々、沈んだ気分が学校をあとにしていたが、日本人の友人との食事の際には、快活になり、学校での様子をおもしろおかしく饒舌に語っていた。
- (ii) 自分自身、学校では陰気なキャラで、友人の前では明るいキャラで行こうと決めていたから、徐々に、意識せず自然に振る舞うことができるようになった。
- (iii) 結局、一つ下のクラスにレヴェルを下げてもらい、そこでもなかなかうまくいかず、落ちこぼれてしまったが、日本人も数名いて、学校では明るくなったり、暗くなったりを繰り返していた。
- (iv) クラス分けの試験の結果、一番上のクラスに入ることになり、予想通りクラスで落ちこぼれてしまい、他の生徒との会話は弾まず、自分がヒドく陰気な人間になっていくのを感じていた。

【問題は以上で終わりです。】